

ゼバスティアン・ブラント『阿呆船』序詩に関する語学的考察

大 島 浩 英

要 旨

ドイツ語史の中で中世高地ドイツ語から新高地ドイツ語への移行段階として存在した初期新高地ドイツ語（およそ1350年～1650年頃）の言語状況を調べるため、1494年にバーゼルで出版されたSebastian Brantによる風刺詩集Das Narrenschiff「阿呆船」を資料として取り上げ、その詩の中に現れた言語表現を分析しながら語学的考察を行った。この詩集は当時の乱れた社会道徳をローマ・カトリックの立場から批判し戒めた説教集のようなもので、後には低地ドイツ語、ラテン語、フランス語、オランダ語、英語などにも翻訳されヨーロッパ各地に影響を及ぼした書物である。

言語面では、現代語のjetztなどに付加されている語末の添音 t がまだ付加されていない語とすでに付加された語の並存、無声音化を示す語尾 t の付加、syn、drynなど二重母音化以前の語形、またsichtとsiechtのように長母音化する前後の母音の並存、接続詞の多義性、あるいは枠構造や語順といった統語規則よりも韻律を優先していると思われる配語法などが見られ、当時のテキストの特徴や現代語との接点などに関する一側面が明らかとなった。

キーワード：初期新高ドイツ語、ゼバスティアン・ブラント、阿呆船、風刺文学、ドイツ語学

はじめに

本稿では、1494年スイスのバーゼルで発行されたSebastian Brantによる風刺詩集 Das Narrenschiff「阿呆船」の序詩を言語資料として用い、15世紀末の初期新高ドイツ語の言語状況を調べながら、現代ドイツ語との関連をこの資料において考察した。中世末期において揺らぎはじめたカトリック教会の権威と道徳的規範。それによって一般社会に

生じた公序良俗の乱れに対しBrantは、この詩集の中で様々な面からの批判と風刺を加えている。本稿で扱う冒頭の詩では、社会のあちこちで見受けられる愚かな行為をする者 (Narr) たちを満載して阿呆の国へ向かう (gen Narragonien) 船を造る、といったこの詩集全体の枠組が述べられている。

この詩は二行一組で脚韻を踏む形式 (Paarreim) で書かれているが、以下の和訳では韻律に関係なくできるだけ逐語訳を行い、また原文には5行ごとに行数を付した。なおこの序詩は全体で136行と長いため、本稿では1行目から44行目までについて考察を行った。

使用テキスト

原文：

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Studienausgabe. Hg. von Joachim Knappe. Stuttgart 2005. (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 18333) S.107 ff.

現代語訳：

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Übtg. von H. A. Junghans. Stuttgart 1964. Bibliographisch ergänzte Ausgabe 1992. (Universal-Bibliothek Nr. 899) S.7 f.

上記および次の各テキストに付された注釈を適宜参考にした。

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Felix Bobertag. Berlin u. Stuttgart 1889. (Deutsche National-Litteratur. hg. von Joseph Kürschner, Bd. 16) S.6 f.

Zarncke, Friedrich: Sebastian Brants Narrenschiff. Leipzig 1854. (Hildesheim 1961) S.296 ff.

略語：mhd. 中 (世) 高 (地) ドイツ語、frnhd. 初期新高 (地) ドイツ語、nhd. 新高 (地) ドイツ語

I

原文

現代語訳

All land syndt yetz voll heylger geschriff

Alle Lande sind jetzt voll heiliger Schrift

Vnd was der selen heyl antrifft /

Und was der Seelen Heil betrifft:

すべての国は今や聖なる書物であふれてる

そして魂の救いに関しては

冒頭のallでは格変化語尾eが、landでは複数形の語尾eがそれぞれ脱落しており、ここでは上部ドイツ語地域の特徴である語末音消失が見られる。またこのland「国」は当

時衰退しつつある神聖ローマ帝国を構成していた「領邦」のことを指しているとも考えられる。yについてはsyndt (>nhd. sind)、yetz (>nhd. jetzt)、heylder (>nhd. heiliger) というようにそれぞれ i、j と同じ音価で用いられている。yetz は mhd. iezuo に由来するが、mhd. iezuo、frnhd. yetz にはない語尾の t が nhd. jetzt では付加されている。geschriftt では接頭辞 ge が schriftt (>nhd. Schrift) に付加されており、ここでは schriftt 「文字、書物、聖書」に対して ge が「集合」の意味合いを添えているものと考えられる。

2 行目の frnhd. vnd > nhd. und の v、u ついてはこの時期ではまだ同じ音価で用いられており、それぞれ子音、母音としての機能分化はまだ見られない。また、名詞 heyl に前置された複数 2 格の selen には mhd. sēle や、あるいは現代語のような長音を表わす e の二重書きがまだなされていない。また不定関係代名詞 was に導かれる副文内で、分離の前綴りをもつ動詞 antrifft が現代語では非分離前綴り be- に置換されて訳されており、基礎動詞 treffen に対する前綴りの意味的作用に変化が生じている。この 2 行では geschriftt と antrifft で脚韻を踏んでいる。

Bibel / der heylgen vätter ler

Voll Bibeln, heiliger Väter Lehr

Vnd ander der glich bücher mer /

Und anderer ähnlicher Bücher mehr,

聖書、聖者の戒め

また他の似たような書物の数々

ここでは文の区切りにヴィルゲル (Virgel) が用いられている。ヴィルゲルの代わりにコンマが使われ出すのは 16 世紀後半からと言われており、このテキストではまだコンマの使用は見られない。複数 2 格の der heylgen vätter 「聖者たちの」は、修飾する名詞 ler 「戒め」の前に置かれたザクセン 2 格で、ler (>nhd. Lehre) には長音を表わす h がまだ表記されていない。

4 行目の ander der glich bücher は mer にかかる複数 2 格で、mer が「より多くのもの」という名詞として機能していると考えられる。また、glich (<mhd. gelich) については語中の i が現代語では ei と二重母音化して gleich へと変化するが、さらにここでは複数 2 格の格変化語尾が付加されておらず、このことは ander の語尾についても言える。ここで 2 語に分ち書きされた der glich は、「そのような (もの)」を意味する現代語の指示代名詞 dergleichen が付加語的に用いられたものに対応すると考えられる。ここでは ler と mer で脚韻を踏む。

Jn maß / das ich ser wunder hab ²⁾ Das nyemant bessert sich dar ab 私が痛切な疑念を抱くほどに それによって誰も善良にならないので	5	So viel, daß es mich wundert schon, Weil niemand bessert sich davon.
--	---	---

Jn maßではjがiと同じ音価で用いられており、またmaßはこの場合、「(das以下の内容)ほどに」という「程度」の意味で用いられている。serは強調の意味の他にここではwunderにかかる形容詞とも考えられ「苦しい」、「悲しい」といったnegativな意味を持っているのに対し、現代語のsehrは「非常に」というpositiv、negativ両方の意味を強調する副詞として用いられており、ここに意味的、用法的な差異が見られる。

6行目の従属接続詞dasはこの場合「～ので」という理由を表わす接続詞として用いられており、副文の内容を形式的に導くだけの現代語のdassとは異なり、darum dass、weilという具体的な意味が付加されている。次に不定代名詞nyemantについてはmhd. niemanに対応するものであるが、前述のfrnhd. yetz>nhd. jetztと同様14世紀以降に広まったとされるtの添音(t-Epithese)により語末にtが付加され、これが現代語のniemandへと受け継がれていく。またdar abでは現代語でdavonとなるように、前置詞abはvonへと移行傾向にある³⁾。ここではhabとabで脚韻を踏んでいる。

Ja würt all gschrift vnd ler veracht Die gantz welt lebt in vinstre nacht そう、すべての書物や戒めは軽んじられ 世界中は暗夜の中に息づいている	5	Ja, Schrift und Lehre sind veracht't, Es lebt die Welt in finstrer Nacht
---	---	---

würtは現代語のwirdに対応するもので、ここではall gschrift vnd lerという複数の主語を単数と見なし3人称単数現在の人称変化で対応している。またgschriftでは集合名詞を表わすge-が語中音消失した形で付加されている。そして文全体はwerdenを用いた動作受動で表現されているが、これが現代語訳ではseinによる状態受動で表現されている。

8行目は文全体の音韻関係からか、vinstreでは形容詞の格変化語尾-erが付加されているが、逆にgantzでは語尾-eが脱落している。ここでは過去分詞の変化語尾-etが欠落したverachtとnachtで押韻している。

Und tut in sünden blind verharren Und tut in Sünden blind verharren;
 All strassen / gassen / sindt voll narren 10 Alle Gassen und Straßen sind voll Narren,
 そして（世界は）罪にまみれても盲目のままである
 すべての通りも路地裏も阿呆で満ちあふれている

現代語のtutに対応するdūtはここでは本動詞verharrenを強調する助動詞として機能して枠構造を形成しており、こういったtunの用法は現代語の口語にも見られるものである。

10行目のsindtや1行目のsyndtに関しては、語尾にtを加えることでdが無声化したことを示しており、この現象は15世紀後半から広まったと言われている⁴⁾。またここではallの語末音eが脱落して韻律が保たれているが、現代語訳ではStraßenとGassenの配置を逆にして音韻を調節している。ここではverharrenとnarrenで脚韻を踏む。

Die nüt dann mit dorheit vmbgan⁵⁾ Die treiben Torheit an jedem Ort
 Wellen doch nit den namen han Und wollen es doch nicht haben Wort.
 彼ら（阿呆たち）は馬鹿げたことばかりする
 なのに阿呆呼ばわりはされたくない

dorheitは現代語ではTorheitとなるが、語頭のdとtは初期新高ドイツ語では地域により競合して用いられている。さてアレマン方言のnütはnichtsに、dannは現代語のalsにそれぞれ対応し、従ってnüt dannはnichts als～「～以外の何ものでもない」を意味するが、Knappeはこれにanderemを添えて „Die mit nichts anderem als Torheit umgehen“ 「馬鹿げたこと以外の何ものをも扱わない」という説明を加えている⁶⁾。また、11行目のnütはnichtsに、12行目のnitはnichtに現代語ではそれぞれ対応しており、ここでは形態上の使い分けがなされている。

現代語の話法の助動詞wollenに対応するものとして初期新高ドイツ語にはwollen、wöllen、wellenなど様々な形態が並存していたが、12行目のwellenでは古い幹母音のeが現れている。Narren「阿呆」との音韻的類似を想起させるNamen「呼び名」についてBobertagは „nicht den Ruf haben (als Narren)“ 「(阿呆としての) 評判を望まない」と説明している。ここではvmbganとhanで脚韻を踏む。

II

Des hab ich gdacht zú diser früst

Wie ich der narren schiff vff rüst

それゆえ私はこの際考えた

阿呆の船を造ることを

Drum hab ich gedacht zu dieser Frist,

Wie ich der Narren Schiff' ausrüst:

文頭のdesはここでは理由を表わす副詞として用いられており、Bobertagはこれに deshalb、darumという注釈を付けている。この行でのgdachtにも完了を表わす前綴り ge-の語中音消失が見られ、また現代語のFristに対応するfrüstにはFrnhd.時代の上部ドイツを中心起こったといわれる母音の円唇化が見られる⁷⁾。

14行目のder narrenは複数2格でschiffにかかり、vff rüstは現代語のaufrüstenに対応して「建造する」という古い意味で用いられていると考えられる。現代語訳ではvff rüstを別の前綴り動詞ausrüstenととらえ、「船に阿呆を乗り組ませる」といった意味で解釈している。ここではfrüstとrüstで脚韻を踏む。

Galleen / füst / kragk / nawen / parck 15 Galeeren, Füst, Krack, Naue, Bark,
Kiel / weyding / hornach / rennschiff starck Kiel, Weidling, Hornach, Rennschiff stark,
ガレー船 (大型軍船)、貨物船、商船、渡し船、帆船
大船、漁船、浚渫船、丈夫な高速帆船

Galleen (>nhd. Galeeren) ではlの重ね書きとrの脱落、füst (>nhd. Fuste) では語末音eの消失、nawenでは母音uの代用として二重母音でよく用いられたwがそれぞれ見られ、またparckにおいては語末での無声化を示すpが語頭で現れている。HornachはZarnckeによればhorn nachが融合したものとして、船首が前方に角のように高く突き出た船と説明している⁸⁾。rennschiff starckでは形容詞starckを後置して前行のparckと脚韻を合わせている。

Schlytt / karrhen / stoßbären / rollwagen

Ein schiff möcht die nit all getragen

そり、荷車、手押し車、乗合馬車⁹⁾

一隻では皆をととも運びきれない

Auch Schlitten, Karre, Schiebkarr, Wagen:

Denn ein Schiff könnnt nicht alle tragen,

Zarnckeはstoßbärenについて、「馬が引く古代の戦車 (Streitwagen)」という解釈もあ

ることを紹介しているが、低地ドイツ語訳のschufborenのようにSchieb(e)karren「手押し車」の意味をここでは採用している¹⁰⁾。18行目のein schiffでは「一隻」という意味を強調するためアクセントが文頭のeinに置かれている。現代語のmöchteに対応する話法の助動詞môchtはこのテキストではmhd. mugenと同様に「可能」の意味で用いられ、「推量」を表わす現代語のmögenでは、アレマン方言にのみこの「可能」の意味がまだ残っている。またgetragenに対してBobertagはertragen「耐える」という説明を加えているが、動詞前綴りge-はこの場合、tragenの動作概念の強調あるいは完了を意味していると考えられ、意味的な変形作用はないように思われる。rollwagen、getragenで脚韻を踏んでいる。

Die yetz sindt jn der narren zal		So groß ist jetzt der Narren Zahl;
Ein teil kein für hant überal	20	Ein Teil sucht Fuhrwerk überall,
今やそれほど多数の阿呆たち		
ある者たちはあちこちで身動きが取れず		

19行目のyetzでも1行目と同様にまだt-Epitheseは起こっていない。文頭のdieは前文のalleを受け、der narrenはzalにかかる複数2格で、現代語では„die jetzt sind in der Zahl der Narren“「そのすべての人々が今や阿呆の数のうちに入っている」といった表現がなされている。

20行目ではein teilという単数の主語に対してhanの3人称複数現在形hantが対応しているため、ein teilはこの場合、意味的に複数主語としてとらえられているが、これが現代語訳では文法的に単数扱いとなっている。またfürについて、KnappeはこれをFuhrwerkとして「乗り物」という具体的な対象を想定しているが、ZarnckeではFahrzeugではなくdie Fahrt「走行、進行」、BobertagでもBeförderung「輸送（移動）」という動作そのものを表わす語との説明を加えており、解釈が分かれている。ここではzalとüberalで脚韻を踏む。

Die stieben züher wie die ymmen		Der stiebt herbei gleichwie die Immen,
Vil vnderstont zu dem schiff schwymmen		Versucht es, zu dem Schiff zu schwimmen:
彼らは蜜蜂のように群がり		
多くは船へとがむしゃらに泳ぎ着こうとする		

Die stiebenではstiebenが3人称複数の主語に対応してstiebenとなっており、前行のhantのようにMhd.には見られた語尾のtがここでは付加されていない形で現れている。

また、「散らばる」を意味するstiebenと共に用いられたzúherに対してBobertagはeinher, herbei「こちらへ」という訳語を対応させ、話者から離れるのではなく接近する方向を示しており、Knappeの原文でも „fliegen heran wie Bienen“ 「蜜蜂のようにこちらへ飛んで来る」という注釈を施している。

22行目のvnderstontでは前行のstiebenとは逆に、3人称複数の主語に対応して古い変化語尾tが添えられた形で現れており、このように人称変化語尾に揺れが見られる。この語についてはmhd. understan「企てる (unternehmen)」、Grimmではsich bestreben「努力する」、versuchen「試みる」、GötzeのGlossarではwagen「敢行する」、また現代語のsich unterstehen「あえて～する」などの解釈が考えられ、Zarnckeではこの再帰用法の意味での説明が加えられている。ここではymmenとschwymmenで押韻している。

Ein yeder der wil vorman syn	Ein jeder will der erste sein;
Vil narren / doren kumen dryn	Viel Narren und Toren kommen drein,
誰もが我先にと	
あまたの阿呆やばか者が乗り込んでくる	

ein yederの意味的強調か、あるいは音韻リズム調節との関係で指示代名詞derが主語と同格で現れており、これは韻文や民謡に古来用いられた語法と言われている。またsynは現代語ではseinとなり二重母音化するが、このテキストではまだ単母音の状態で見られている。23行目のdorenでは11行目のdorheitと同様語頭のdがまだ無声子音化していない形で残っており、またmhd., frnhd. kumen>nhd. kommenの母音の差異、23行目のsynと同様に単母音のdryn (>nhd. drein)などの現象が見られ、これらsynとdrynの単母音の語で脚韻を踏んでいる。

III

Der bildniß jch hab har gemacht	25	Deren Bildnis ich hier hab gemacht.
Wer yeman der die gschrifft veracht		Wär jemand, der die Schrift veracht't,
そんな姿をここに書いてみた		
文字が嫌いな者は		

25行目文頭の指示代名詞、あるいは関係代名詞の三人称複数2格形derには、現代語のderenと異なり語尾の-enが欠落している。また完了助動詞habの位置が韻律の影響で文法的に不安定な状態にあると思われる。26行目のwerは不定関係代名詞mhd. swer

「～する人は」に対応するものだが、ここではその後にはyemanという主語を補足的に添え、さらに続けて指示代名詞を同格に置いて主語を強調しているものと考えられる。ここではverachtetの変化語尾-etを省略してgemachtとで脚韻を踏む。

Oder villicht die nit künd lesen	Oder einer, der sie nicht könnt lesen,
Der siecht jm molen wol syn wesen	Der sieht im Bilde wohl sein Wesen
あるいはその文字を読めない者は	
絵の中に自分の姿（存在）をよく見るがいい	

27行目では話法の助動詞mhd. kunnen (>nhd. können)の接続法第2式künd(e)が副文内の文末に配置されて枠構造を作るまでには至らず、本動詞lesenの前に置かれ音韻が整えられている。28行目では、26行目で不定関係代名詞として用いられたwerに呼応する指示代名詞derに続いて定動詞がsiechtという形態で現れており、mhd. sichtから長母音化していることがわかる。また現代語のmalen「絵を描く」と類似した形態のmolenに対しては、Zarnckeではgemälde、KnappeではMalereiという説明がなされている。ここではlesenとwesenとで脚韻を踏んでいる。

Vnd fyndet dar jnn / wer er ist	Und schaut in diesem, wer er ist,
Wem er glich sy / was jm gebrist /	30 Wem gleich er sei, was ihm gebrist.
そして、その中に誰があいつかを見つけるがいい	
誰にあいつが似ていて、何が足りないかを	

fyndet, jnn, istのy、j、iはすべて同じ音価で用いられた異なる表記である。さてwer er istのistと、wem er glich syのsy (>nhd. sei)についてはそれぞれ直説法と接続法とで異なる表現がとられているが、ZarnckeはこのModusの違いに特別な差異を見出すべきではないとしている。またglichには4行目と同様現代語のgleichのように、二重母音化される前の単母音の形が残っている。ここではistとgebrist (<mhd. gebresten「欠けている」)とで脚韻を踏んでいる。

Den narren spiegel ich diß nenn	Den Narrenspiegel ich dies nenne,
Jn dem ein yeder narr sich kenn	In dem ein jeder Narr sich kenne;
これを私は阿呆鏡と呼んでいる	
その中で、誰もが自分を阿呆と気づく	

29行目のdar jnn (>nhd. darin)と同様に31行目でも、一つの語という意識が弱い
ためnarren spiegelと2語に分けた表記法が見られる。定動詞nennの位置については、32
行目のkennと押韻させるため2番目ではなく文末に置かれており、その結果erkennen
「認識する」の意味で用いられているkennも接続法第1式の形で31行目のnennとで脚韻
を踏んでいる。

Wer yeder sy wurt er bericht

Wer jeder sei, wird dem vertraut,

Wer recht in narren spiegel sicht

Der in den Narrenspiegel schaut.

皆は自分が誰なのかを知らされる

阿呆鏡をよく見る者は

33行目はjn. (人の4格) etw. (事物の2格) berichten「(人)に(事)を報告する、
教える」という古い用法を、「人」を1格の主語として受動文にしたものと考えられる。
ここではwurt (>nhd. wird)による動作受動が表現されているが、現代語ではseinを助
動詞にした状態受動も用いられる。なお、受け身の助動詞として7行目ではwürdtが用い
られており、母音に揺れが見られる。また34行目のsichtはmhd. sichtと同様に短母音で
現れているが、28行目ではsiechtという長音化した形も見られ、同じテキスト内でも不
安定な状態にあることがわかる。ここでは過去分詞の変化語尾-etが欠落した形の
berichtとsichtとで脚韻を踏んでいる。

IV

Wer sich recht spiegelt / der lert wol

35

Wer sich recht spiegelt, der lernt wohl,

Das er nit wis sich achten sol

Daß er nicht wise sich achten soll,

わが身をしっかりと映す者にはよくわかる

自分を利口と思うべきではないことが

33行目から35行目の各行頭はすべてwerで始められており、ここでは行頭韻のような
効果が感じられる。34行目、35行目の不定関係代名詞を主語としてそれに定動詞lertが
続いおり、lertはこの場合lernen「学ぶ」の意味で用いられているが、leren (>nhd.
lehren)「教える」とlernen「学ぶ」との混同は15世紀初頭から見られたようで、leren
の代わりにlernenが用いられるよりもlernenの代わりにlerenが使用れる場合の方が多く、
lerenが優勢であるとZarnckeは述べている。¹⁴⁾

36行目のdasは現代語ではdassとsが重ね書きされるが、初期新高ドイツ語ではこの

区別はまだなされていない。また、wisという語でも現代語のweise「賢明な」のように二重母音化がまだ起こっていない。対韻となる35行目と36行目の文末の語はそれぞれ wolとsolで同じ音でこれら2語が脚韻を踏んでいるのだが、これが現代語になると wolは長母音のwohlへ、solは短母音のsollへと変化し、表記法もそれぞれ異なったものになる。

Nit vff sich haltten / das nit ist /	Nicht von sich halten, was nicht ist,
Dan nyeman ist dem nütz gebrist	Denn niemand lebt, dem nichts gebrist,
ありもしない（理想の）姿を自分と思い込んでではない	
至らぬところがない者などいないのだから	

37行目の文には主語がないため、前文の副文がこの行まで続いているとも考えられるが、この場合は不定詞による一般的な命令、警告の表現と見ることもできる。次にvff sich halttenについて、現代語訳ではvon sich halten「～と評価する」と訳されており、この意味における前置詞vff (>nhd. auf) とvonの用法に差異が見られる。また、dasがここでは不定関係代名詞wasとして機能しており、「現実ではないもの、存在しないもの」といった意味で用いられていると思われるが、この時代には不定関係代名詞としてのwasとdasの使い分けがまだ未分化であったことがわかる。

38行目のdanは現代語では「理由」を表わす接続詞dennに対応しており、現代語のdennと「それから、その時」を意味する副詞のdannとは意味的、文法的に区別されているが、初期新高ドイツ語の時代にはこの区別があいまいである。またここでも、nit (>nhd. nicht) とnütz (>nhd. nichts) の使い分けはまだ維持されていると言える。この2行ではistとgebristで脚韻を踏む。

Oder der worlich sprechen tar	40	Noch der behaupten darf fürwahr,
Das er sy wis / vnd nit ein narr		Daß er sei weise und kein Narr.
また本当にあえて言える者も（いないのだから）		
自分は利口で阿呆ではない、と		

oderに続くderは前行のnyemanを受ける関係代名詞と考えられ、前行のdemと並んでnyemanを関係文により説明しているものと思われるため、39行目は否定的な意味合いの文となっている。また文末のtarについて、Bobertagはこれをdarfと解釈して「許可」を表わす現代語の話法の助動詞dürfenを充てている。tarは本来mhd. turren「あえて～する」の人称変化形であるためKnapeの注釈wagtが妥当と思われるが、初期新高ドイツ

語の時期にこの語自体が消滅してしまったため、その後dürfenの意味との間に混同が生じたものと思われる。「あえて言う」の「言う」についても、原文ではsprechen「話す」、Bobertagの現代語訳ではbehaupten「主張する」、Fischer訳ではsagen「言う」とそれぞれ訳されており¹⁵⁾、turrenと関係する本動詞のニュアンスに微妙な差異が見られる。なおこのtarは副文章の文末に位置しているため、ここでは定動詞後置が行われて枠構造が形成されていることになる。

これに対して40行目文頭のdas (>nhd. dass) 以下は前行のsprechenの内容を指す副文であるが、定動詞sy (>nhd. sei) が主語に続いて置かれ文末には位置していないため、ここでは枠構造はあまり意識されていないと言える。またnit einを、この箇所に対応する現代語訳やあるいは20行目のようにkeinとはせずに用いていることなどから、統語上の規範よりも韻律への意識の方が強く働いているものと思われる。ここではtarとnarrで脚韻を踏んでいる。

Dann wer sich für ein narren acht	Denn wer sich selbst als Narr eracht't,
Der ist bald zú eym wísen gmacht	Der ist zum Weisen bald gemacht,
なぜなら、自分を阿呆と思う者は	
(そのような人は) 直ちに賢者とされるだろう	

文頭のdannは現代語の「理由」を表わす接続詞dennに対応するが、38行目ではdan、41行目ではdannと今度はnが重ね書きされた形で現れており、同じテキスト内でも書記法にばらつきがある。またein narrenはfürの格支配を受けて4格であるが、不定冠詞の語尾に-enが脱落し格表示が不明確になっている。

42行目のeymは現代語ではeinemとなるが、ここでは短縮形にして母音の数を削減している。またist~gmacht (>nhd.gemacht) では受動の表現が見られるが、ここではseinを助動詞とする状態受動、文末にwordenを省略して動作受動の完了形、あるいは分詞形容詞としてのgmachtなどの解釈の可能性が考えられる。この文に対してFischerは、„wird bald den Weisen zugesellt“ というwerdenによる動作受動で現代語訳している¹⁷⁾。ここではachtとgmachtで脚韻を踏んでいる。

Aber wer ye wil witzig syn	Wer aber stets will weise sein,
Der ist fatuus der gfatter myn	Ist fatuus, der Gevatter mein,
それでも賢者でいたがる者は	
大したばかり、わが相棒	

43行目のyeにはmhd. ieと同様にimmer「常に、いつも」の意味が引き継がれているが、この語形に対応する現代語のjeではこの意味はもう表現できない。また賢者に対してはwis (>nhd. weise) という形容詞がこれまで用いられていたが、ここではwitzigがwisと同義で用いられている。しかし現代語ではwitzigがこの「賢い、利口な」という意味で用いられることはまれになっている。44行目のラテン語fatuusに対してはKnappeにはeinfältig「単純な」、Dumme「愚か者」という説明があり、またBobertagでもThor「ばか者」といった注釈が付されており、ここでラテン語を使うことにより後のgfatter (>nhd. Gevatter) とのWortspiel「言葉遊び」を行うため、という解釈がなされている。文末のsyn (>nhd. sein)、myn (>nhd. mein) がこの時代まだそれぞれ単母音のままで脚韻を踏んでおり、そしてこの押韻のために43行目では、本来副文内で文末に来て枠を作るべき話法の助動詞wil (>nhd. will) が、ここでは文末の位置から外れて配置されている。

なお、今日ではほとんど用いられなくなったGevatterという語は、「名付け親、親類、隣人」といった親しい仲間を指す言葉である。Brantは、自らをも含めた身の回りにいる仲間たちの愚かさをこの語によって暗示しているのかもしれない。

注：

- 1) Dal, Ingerid: Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage. 3 Aufl. Tübingen 1966. S.26.
- 2) wunder habに対してZarnckeは „persönlich construiert“ 「個人的に作られた」表現という説明を加えているが、またこれはすでに12世紀にLamprechts Alexanderにおいて見られたものであるとも述べている。Zarncke, Friedrich: Sebastian Brants Narrenschiff. Leipzig 1854. (Hildesheim 1961) S.296.
- 3) Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. 10. Aufl. Tübingen 2002. S.31.
- 4) 工藤康弘・藤代幸一著『初期新高ドイツ語』大学書林 1992年、34-35頁。
- 5) mhd.umbe gan>nhd.umgehen
- 6) dannは英語のthanに対応。
- 7) 工藤康弘・藤代幸一 前掲書、43-44頁。
- 8) Zarncke, Friedrich: a.a.O., S.297.
- 9) Georg Wickramにこの語を用いたDas Rollwagenbüchlin (1555) というタイトルのシュヴァンク集がある。
- 10) Zarncke, Friedrich: a.a.O., S.297.
- 11) „verstärktes tragen“ Grimm, J./Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854-1971. (dtv 5945) Bd.5. S.4411.
- 12) 工藤康弘・藤代幸一 前掲書、123頁。
- 13) Zarncke, Friedrich: a.a.O., S.297 f.
- 14) Ebd., S.298.
- 15) Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Heinz-Joachim Fischer. Wiesbaden 2007. S.30.
- 16) Fischerはkeinではなくnicht einを用いて現代語訳している。Ebd., S.30.
- 17) Ebd., S.30.

上記以外の参考文献：

- Baufeld, Christa: Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996.
Ebert/Reichmann/Solms/Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993.
Gärtner, Kurt / Steinhoff, Hans-Hugo: Minimalgrammatik zur Arbeit mit mittelhochdeutschen Texten. 2.Aufl. Göppingen 1977.
Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.
Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38.Aufl. Stuttgart 1992.
Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Manfred Lemmer. 3., erw. Aufl. Tübingen 1986.
(Neudrucke deutscher Literaturwerke, N.F., Bd. 5) S.3 f.
伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一・松浦順子・有川貫太郎編『新訂・中高ドイツ語小辞典』同学社 2001年
下宮忠雄・金子貞夫・家村睦夫編『スタンダード英語語源辞典』大修館書店
S. プラント著 尾崎盛景訳『阿呆船 (上)』現代思潮社 1968年
山口四郎著『ドイツ韻律論』三修社 1973年